原野わがふるさと

下

早船ちよ

理論社

ふるさと 下

早船ちよ

小説国民文庫

原野わがふるさと（下）

© 1965年7月　第1刷

定価380円

作者　早船ちよ

発行者　小宮山量平

東京都千代田区神田神保町一の64

発行所　株式会社 理論社

電話 東京(291)5668-9

振替口座 東京95736

印刷 誠和印刷

製本 橋本製本所

原野わがふるさと

＊夏のメルヘン＊

もくじ

12 春のあらし／5
13 新しい生命／22
14 チルワツナイ会議／37
15 野火はしる／56
16 助かるものなら助かるべし／66
17 ランプ小屋会議／82
18 乳は、土からしぼれ／98

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

19 霧にゆれる影／131
20 阿寒湖の集い／165
21 囚われびと・囚われた国／175
22 ベカンペ祭り／190
23 1964年秋／201
あとがき／238

そうてい・さしえ／久米宏一

12 春のあらし

多鶴江は、クリゲにのって、たったひとりで、雪の原野をいく。

白い原野は、はてしない海に似ている。小さな多鶴江は、白い海へ、ふっと呑みこまれそうな怖じ気がして、思わず小走りになる。

ずぶっ、ずぼっ、ずぶ、ずぼっ。馬は凍てついた雪道を歩きなやみながらも、おとなしくムエンヌケの野呂牧場へむかっていく。

「クリゲよ、クリゲよ」

多鶴江は、馬の首すじを、そっとたたいて大声で話しかける。

「ねえ、とうちゃんは、おまえの飼葉がなくなったから、ムエンヌケの野呂牧場へあずかってもらえっていうのよ……」

クリゲは、ぽくぽく歩きながら、わかったというように首を振り、耳をぴくぴくと動かす。

「ねえ、ようく聞いてけろ。うちの飼葉が足りないと、お前の見栄を悪くして見っともねえからって、とうちゃんがいうのよ。春には、呼びにいく

から、それまでな」

多鶴江は、馬に話しかけながら、気づかわしげに、雲行きをながめるのだった。ぼろくずのような汚ない雲が、原野の上いちめんに、ぶわっと、重たく、たれ下がっている。

——早くいって、急いで帰るべし。雲行きが怪しくなってきたから、吹雪がくっかもしれんよ——と、母のフミは、門口まで見送りにでて、くどくどと注意したっけ。

神経痛で朝から、うんうんうなって、腰痛を訴えていた寅吉が、ねどこに腹ばったまま、戸口へ目をやった。

——そうだナ、吹雪になると春のあらしだから、原野じゅう、狂人が暴れるみてえに吹きまくるべさ。あすになってから行くべし。

戸口からは、原野の白い地平線と、それにおっかぶさる重たい鉛色の空。その鉛色の空にうずをまく黒い雲の流れが、ねたままで見とおせる。

——春のあらし？　上の弟の茂が、とんきょうに叫んだ。

——春がくんの、とうちゃん、春が！

武が、ぱっと目を輝かして、寅吉のひげ面をのぞきこむ。

——ああ、春！

多鶴江まで洞窟のように暗い開拓小屋の内部へ問いたださずにはいられない。

——春……春！　ほんとうに、春って、やってくる気なのかねえ。

フミが、めったに見せぬ笑顔で、ことしの冬ほど長い冬はなかったねえ……と、ため息まじりにいう。

春、春！

どんなに待ちこがれ、ガンケ下の野呂一家が待ちどおしがって一日一日と暮らしてきていることだろう。いや、ガンケ下の野呂一家ばかりではない、ことしは、部落のだれもかれも、顔をあわせると、あいさつ代わりにいい暮らして、手をのばして引っぱりよせたいほど、待ちこがれている春。

遠い地平線の、そのずっと先に、コチコチに凍れて、むんずり動きもしないでいる春。

——うん、春のあらしはな。大吹雪になって、めったやたらに、原野じゅうをあばれまくる。そったらでかい吹雪が、二度三度、思いきり、あばれまくると、こんどこそ、いっぺんに、春だ。どうっと、音立てて雪どけがくる。

雪どけのあたたかい陽気が、腰ん骨をさいなむ神経痛をも、うそのようになおしてくれるだろう——と、寅吉はおもう。半年ぶりで、黒土が、ちょっとでも顔をだしたら、春の農作物の耕起だ。

寅吉は、胸がときめいてくる。

百姓を、長年やってきたものだけが、からだじゅうで知る春の歓喜である。

——多鶴江よ、やっぱり、きょう行ってきてくれ。クリゲには、春の耕起に、うんと稼いでもらわねばならぬ。もりもりと、日いっぱい、働かさにやならぬからな。——すまねえが春まで飼葉のせわを見てけろと、シゲノ婆さまに頼め。そのぶんとうちゃんが、マキ割りでもマキ伐りでも手伝わしてもらうから……とな。

寅吉は、やさしくそういった。

——うん、あらしに巻きこまれないように、早く行ってくる。

多鶴江は、元気よく家をでた。

父の寅吉は、このごろ（タネ盗み事件のあと）人がかわったように、家族のだれかれにやさしい。何よりも、原野の開拓地をすててどこかへ行ってしまう話など、ちっともしなくなった。多鶴江には、それがうれしい。

フミが、道まで追いかけてきて、大声でどなるように叫んだ。

——多鶴江よーう！　もし、あらしがひどくやってきたら、ムエンヌケさ泊めてもらうべし。

——泊まっても、いいの？

——ああ、泊まってくるつもりで、気をつけて、ゆっくり行け。春のあらしは、日いっぱい、夜まで吹きつづけるからな。

空は、ますます暗くかげり、風がでてきた。
「南からの風……春の前ぶれの風よ」
風は、ごうっと、原野のはてから吹きあげてきて、ざらめのような積雪を巻きあげ、吹きつけてくる。
ふき去ったかと思うと、第二波だ。ごうっと。幅ひろく、手をひろげて襲ってくる。馬は、風がいきすぎるまでは、立ち止まって、たてがみをふるわす。
多鶴江は、風にむかって、まっすぐに胸を張り、髪の毛を吹きちらしながら行く。
——春をもってくるあらしよ。思いきり吹け。思いきり吹きあれるがいい。
馬をいそがせながら、多鶴江の胸は、喜びの予感に、ふいに、ことこと、鳴りだした。
——そうだわ、あたいのべこが生まれる。そして、俊二さんのべこも。
「クリゲよ。どっちのべこが、先に生まれるだべな。あはははは。あたいの方が先だといいんだけどな」
俊二と多鶴江が、寒ざらし馬の捜査隊に加わった、そのとき。上月(こうづき)牧場の馬は、六頭助かっている。俊二は、父の上月直樹に、
——多鶴江が、あのとき、うんとがんばってくれたのを、パパだって知っているだべ。そのお礼にぼく、この春生まれるぼくのべこのうち一頭だけは、多鶴江にあげることに決めたんだ。
と、云った。相談でなく、宣言である。父はびっくりして、けげんそうに、息子を見る。
——でも、このことね。ぼくと多鶴江だけの秘密だから、まだ、いまのうちは、ほかのだれにも、いわずにおいてね、パパ。
父は、俊二をまじまじと見ていたが、やがて、ひとり前の男にそうするように、ポンと肩をたたいて、笑いながら、うなずいた……。
「クリゲよ。春がくると、べこが生まれる……。わたしのべこが……」
ごうーっ、ごうっ！ 原野の流れ沿いのヤチハ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ンの木の並木が、箒のようにしなったかと思うと、もうもうとした雪煙がおそってきた。
多鶴江を、馬ごと、ひっさらって、天へ巻きあげそうな龍巻である。
この雪煙をあいずに、風と雪は、南から北へ、北から東へ、原野じゅうに白い渦をまき、百、千のムチを鳴らして吹きあれた。
風雪が、ちょっと息をひそめる一瞬をねらって、多鶴江は、馬を走らせる。風と追いかけっこをしている、はしっこい動きである。
原野のはて、地平線のあたりに、ぽつんとスキーをこいでくる黒い人影をみた。人影は、風のまにまにとぶ木の葉のように、いまにも、ヤチへたたきこまれそうな心もとない姿勢で、こちらへ向かってくる。
「おや、あれは誰だべ？　おうーい！　おうーい」
全身で、声をふりしぼって叫びかけた。とたんに、多鶴江は、馬にふりおとされそうになった。必死に、馬の首にしがみついた。
スキーにのった人影も、そんな多鶴江を目にとめたのだろう、スピードをあげて、ひた走りに走ってくる。
――あ、あっ！　俊二さんだわ。俊二さんがどうして？　……そうだ。べこ。きっと、そうだわ。お、おーい！　おうーい。
多鶴江のほおが、ぱあっと赤くなった。
雪が、さっさっと、降りしきる。
強い風も、ごうごうと、うなりを上げて、原野といわず、空といわず、吹きまくってくる。もうもうと吹きつける雪煙と、たつまきと、風で、多鶴江の目の前は何にも見えなくなった。目も口も、開いていられない。しかも多鶴江は、盲めっぽうに前進していく。

*

「多鶴江！　おうーい」
雪煙の、ずっと向こうで、はっきりと名前を呼んでいる。

「ほ、ほうーい！　ほうい」
多鶴江は、その呼びかけに全身でこたえて、ぼうばくとした白い原野を、ひた走りに走る。
「た、ず、え！」
「ほうーい、ほ、ほうーい！」
風に流されて、遠くなり近くなる呼び声を目あてに、前進していく。ヤチへころがりこむ心配はないようだった。目は、吹雪でふさがれても、俊二の呼びかけが、少しずつ近づいて、道案内のレーダーになった。
「多鶴江！」
「ほうーい、ほうーい」
「がんばれえ……」
「ほうーい」
とつぜん。吹雪のなかから俊二があらわれた。彼は、両手をひろげている。
「あっ俊二さん」
多鶴江は、馬からころげおちるように、とびおりると、俊二の両腕へとびこんだ。
「ああ、うれし、ああうれし！　いつ、べこが生まれるの」
多鶴江は、ほおを、まっ赤にほてらせて、大きな目を、くりくりと動かす。
風が、ふっと静まった。すると、雪までがおとなしやかな大がらなぼたん雪にかわって、ほっほっ、ほっほっと愉しげに舞いはじめる。
俊二は、荒い息をしずめながら、
「なして分かったの？　べこのお産が」
「春ですもん、ほら、春の雪が降ってきた」
風がおとなしくなると、ふんわりふんわり、雪も積もりつむ。花びらのような雪は、いちめんの原野へ、ふくよかなやさしい曲線をえがいて積もっていく。淡く、大がらなぼたん雪は、むしろ艶な感じさえする。
多鶴江は、春を告げる小鳥のように、とつぜん、けたたましく笑いだす。
「ね、ね、原野のずっと遠くから、俊二さんの呼ぶ声がきこえてきたわ。多鶴江――！　ほ、ほう

い、あ、べこだなって、すぐわかったわ」
「へえ……カンがいいんだな。でも、ぼくだってさ、クリゲの啼き声をきいたとたんに、……あ、多鶴江と考えたもん」
俊二は、そういい、いい、クリゲの手綱をとって方向転換させる。
「あら、どうして？　多鶴江だと思った」
「だって、クリゲの声だろ、あ、ぼくらの馬っ子だ！」
「ちがう……ちがうべさ。クリゲは多鶴江の馬っ子だわ」
「ごめん、ごめん、そう思ったって話さ」
「それだけならいいけど、あら、わたしたち、どこへいくの」
「きまってるべさ。才子さんを呼びにさ。今夜あたり、べこが生まれると、金がいってたもん」
「わ、たいへんだ。なぜ、有線で呼ばないの。……もしもし、馬大名の谷川さん……」
「ばかだな。呼んだども、才子さんは清水先生がよびにきて、スキーで、尾間木宙助の酪農研究会さ行ったっていうんだ」
「ああら！　あっはっはは！」
「どうした？　急に笑いだしたりして」
「だって、あっはっはは」
「なぜ笑うの。酪農研グループの会さ行ったどって、馬大名の十一番めの伜がいってたんだよ」
「それは、そうだべさ。だども……あはは」
多鶴江は、うれしくてならないように、ころころ笑うと、こんどは俊二の肩につかまって背のびして、ささやく。
「ないしょよ。清水先生は、才子さんさヨメにほしがっている」
ふいに、おいしい果物のような少女の体臭と、健康な汗のにおいが殺到してきて、俊二を、どきんとさせる。俊二は、頬をほてらせた。
「はんかくさい！」
「ねえ、それで、尾間木さんへ才子さんを迎いにいくとこなんでしょう？　あたいも行くわ」

歩きだすと、ふたたび、風がでてきた。雪が乱舞しだした。背のたかい俊二は、多鶴江の肩を抱くようにして、二人は身をよせあって、近道をとって、アカダモの湖へ向かう。

多鶴江が、馬を野呂岩太郎牧場へあずけにいくところだ——と話すと、俊二は首をふった。

「だめ、だめ、そったらこと。多鶴江は、べこが生まれたら、家へ乳しぼりにくる約束だべ。そのときのる馬がいなかったら困るだろ」

「だって、クシロ馬のため取っといたシマ草や、えん麦を、クリゲったら倍も食いこんでしまったのよ」

「飼葉ぐらい、うちに来たとき、食わせるべし。なんなら、金や李にたのんで、よけいに、もらってやってもいい」

「だめ、ゼニがねえもの」

「ゼンコなんか、寄こせといったかい」

「そんなら……ね、とうちゃんは、飼葉のかわりに、マキ割りにでも、木伐りにいってでも、手間で払うっていってたから、それでよかったら……」

「ばかだなあ、多鶴江は、ぼくん家の乳しぼりのアルバイトにくるんだろ。飼葉なんて、それで支払うのは、当然なんだ」

「いや、いやっ！」

多鶴江は、ふいにとびのいて、俊二にいどむように唇をとんがらせて叫びたてた。

「ばか！ クソったれ！ そったらこと、ぜったいに、いや、いや」

「なしてさ」

「だって、アルバイトの代わりに、べこをやるっていったくせに、それをいまになって飼葉だなんて、ずるいわ」

「あっはっはっはは、あっはっはははは」

こんどは、俊二が笑いだす。腰がぬけるほど大笑いするので、かえって多鶴江があっけにとられて、目を丸くする。

「べこは、べこ。約束どおりさ。そのこと、おやじにも了解さしたんだぜ。飼葉は、フロクなんだ。

春までだもの、馬一頭の飼葉ぐらい、いくらでも、ねえべさ」
「でも、ただはいけない。きらいだわ」
多鶴江は、がんとして首をふる。ただもらうのはこじきである。誇りたかい開拓は、こじきのまねをしてはいけないのである。
バラ線ぞいの馬道をいくと、台地の樹林のなかに開拓農家がみえてきた。クシロで焼けだされて、戦後二年ほどして入植してきた升田夫婦と娘二人の、粗末な開拓小屋は、雪洞のように、入口をのぞいて三方、雪に埋もれている。この一棟には、トネ（当年）つきの二頭の馬と乳牛一頭も、同居している。ツルキ村のうちでも北東のはずれ、山地で立地条件のわるい一軒家だ。
開拓小屋から、坂をおりたアカダモ湖に近い低地に炭焼小屋がある。そこから、一匹の赤犬がとびだしてきて、二人を見かけると、しきりに吠えたてた。
「ひゃーっ！　ここまで、おいで、ここまでおいで」
多鶴江が、ふざけた声をあげ、赤犬をからかって、手をひらひらふりながらかけだした。馬が、その後ろから、とことこ駈けだし、そのあとを、俊二が追いかけていく。
おうい、おうい！　大声でさけび、さけび走っていく俊二を、炭小屋からとび出してきた男が、いきなり、きき腕をとらえて、ねじあげた。
「うるせい！　わいわい、ふざけると、なぐりとばしてやるどう」
いうより早く、パシッと、熊のようなてのひらが、ほおげたをなぐりつけてきた。俊二は、烈しい痛さに目がくらんで、雪の上へひっころがった。
「やい！　ここらあたりで騒ぎたてると新聞記者のあンちくしょうと同じこった。うぬっ、もうひとつ、でっかいのを喰らわそうか」
俊二がはねおきようとして見上げると、金毛の見事なヒグマの毛皮を着こんだ大男が、こぶしを固めて仁王立ちしている。雪帽をまぶかにかぶっ

たくぼんだ眼窩に、灰青いろの目が、キラリ光る。刃物のように冷たく、疑い深い目だ。
「あっ、おじさん！　ミサキのおじさん」
多鶴江が、大声で叫んで、ヒグマの皮をかぶった大男にむしゃぶりついた。
「ミサキのおじさんったら！　なして叩くのよう。あたいたち、何悪いことをしたのよう」
大男は、ふりあげた手に、全身でとびかかって抗議する多鶴江をみて、
「おっ！　ガンケ下の娘だな」
と、ひどく、うろたえた。
俊二も、すっくと起きあがっていった。
「ミサキ！　なして、おまえは」
だが、すぐ気づいたふうに、後ろの炭焼小屋をふりむいてみる。
「あ、あんたは、上月牧場の坊ちゃん」
「ミサキ！　おまえは。……あっ、そうか」
俊二は、わかったというように大きくうなずいて、炭焼小屋へおりていった。

そのとき、小屋のむしろ戸をはねあげて、茅沼がはいだしてきた。
「おっ、茅沼だ」
俊二が、びっくりすると、茅沼は間のわるそうな顔をそむけた。そっちは、小屋へ通じる小道で、きびがらがしきつめてある。その先十メートルのところに、猟師のつくるワラがこいの仕掛けがあった。
「茅沼は――ツルをつかまえるのを止めた、ツルは、ヤチの神さまだから……と、ぼくのおやじに云ってきた……というね」
俊二は、茅沼のそむけた顔のほうへまわっていって、顔をまっすぐに見上げて聞いた。
「……」
「おやじが困ったといってたよ。茅沼は、こうといいだしたら、ぜったい聞くような男じゃないから――と」
「おら知らね」
茅沼は、俊二の視線をさけるように反対がわを

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com